■研究十二月往来〈215〉

少年世阿弥の「異能」

―『醍醐寺新要録』所引『隆源僧正日記』の記事をめぐって―

天野文雄

最近創刊された『ZEAMI』（松岡心平氏編で年二回刊行の由。森話社刊）に掲載されている石井倫子氏の論考「「天下の許され」そして「名望」―『花伝』を手がかりに―」には、珍しく応安年間（一三六八～七四）の観阿弥親子による醍醐寺での七日間の猿楽を伝える『隆源僧正日記』応永三十一年（一四二四）四月二十日の記事が引用されている。この記事は醍醐寺第八十代座主義演の編になる『醍醐寺新要録』に引かれているもので、世阿弥の少年時代の事績として著名なものであるが、そのわりには意外に引用されることがないようである。「珍しく」と言ったのはそのためなのだが、石井氏の論考に引かれているその記事はつぎのとおりである。

廿日　伝聞、今日楽頭始猿楽可有之云々。此観世入道親勧世、光済僧正時、於当寺、七ケ日猿楽、其以後名誉而、京辺被常翫了。今観世入道其時小児尽異能了。是又不劣親、上手名誉者也。

石井氏の引用はここまでだが、この記事はこのあと、「今子共三人又以上手也。声誉有之、三代猿楽也。名望相続、今年此寺楽頭、可謂珍重云々」と続いて終わっている。

醍醐寺の鎮守社である清滝宮の四月の祭札には、古来摂津の榎並猿楽が楽頭として参勤していたが、この年、楽頭兄弟があいついで死去したため、世阿弥が新しい楽頭として同祭礼の能を勤めるようになった。その祭礼での能も無事に終わって、この日、世阿弥は楽頭就任を感謝する楽頭始めの能を醍醐寺で行った。右はその楽頭始めの能のことを伝え聞いた隆源僧正が、応安年間に醍醐寺で行われた観阿弥親子による七日間の能興行を思い出し、それが観阿弥の「出世」の契機となったこと、まだ少年だった世阿弥がみごとな芸を披露したこと、その少年役者が、その後、父観阿弥にも劣らぬ役者となって、およそ半世紀ぶりにゆかりの醍醐寺に楽頭として縁を持つようになったことなどを感慨深げに記したもので、世阿弥や能楽に関心を持つ者には、まことに興味深い内容の記事である。

さて、石井氏の論考に引かれたこの記事で筆者の目にとまったのは、少年世阿弥の神童ぶりをのべた傍線部の「異能」である。というのも、この部分は、この記事を最初に引用した能勢朝次氏の『能楽源流考』では「芸能」となっているからである。『能楽源流考』には六九七頁と七二〇頁の二カ所にこの記事が引かれているが、そのいずれもが「芸能」である。それ以後、この記事は『能楽源流考』に拠って引かれることが多かったが、その場合は、この部分は当然「芸能」であった。小林静雄氏の『世阿弥』（昭和18年。檜書店）や『能楽史研究』（昭和20年。雄山閣）、北川忠彦氏の『世阿弥』（昭和47年。中公新書）などがそうである。筆者の「「世阿弥のいる場所」デビュウの頃―醍醐寺・新熊野社など」（『国文学　解釈と教材の研究』平成2年3月）もやはり「芸能」であった。

一方、この記事を収めている『醍醐寺新要録』は昭和二十七年に赤松俊秀氏の校訂で京都府教育委員会から全体が上中下の三冊に翻刻されて刊行されたが、問題の箇所は「異能」とされている（その後、同書は醍醐寺文化財研究所から再刊されているが、この箇所はやはり「異能」のままである）。これ以後、問題の箇所はこの公刊本に拠って引用されるようにもなったようで、林屋辰三郎氏の『中世芸能史の研究』（昭和35年。岩波書店）、堂本正樹氏の『世阿弥』（昭和60年。劇書房）などが問題の箇所を「異能」としているのは、右の公刊本に拠ったものと思わ

れる。そして、冒頭に紹介した石井倫子氏の事例はその最新の例ということになるのである。

この部分を東京大学史料編纂所の写真によって義演自筆本の『醍醐寺新要録』（醍醐寺蔵）で検すると、そこは「吳能」となっているから、ここは公刊本の翻刻の「異能」が正しいことになる。考えてみれば、「芸能を尽くす」は分かったようでよく分からない言い回しであるが、「異能を尽くす」なら文章として自然である。

これでこの記事の本文上の問題は片づいたが、それで問題は終わったわけではない。というのも、ここが「異能」であれば、それは少年時代の世阿弥の芸風にかかわってくると思うからである。この一文がそのときの少年世阿弥の芸を誉めたものであることはいうまでもないが、「異能を尽くす」というと、たんなる上手というのとはいささか異なる響き、さらにいえば、正統からはすこし外れた芸というニュアンスをもっているように筆者には思われる。このときの世阿弥は少年役者として観衆を驚嘆させる演技を披露したようだが、それは隆源僧正が書き記したように、文字どおり「異能」な芸だったのではないかと思うのである。そう考えてよければ、この少年時代の「異能」は後年の世阿弥の能役者としての芸風を考えるうえでも、ひとつのよい材料となるように思われる。

筆者がこの「異能」から想起するのは、世阿弥にかかわる二つのことがらである。一つは世阿弥が小男だったということ。これは周知のように昭和四十四年に森末義彰氏によって桃源瑞仙の『史記抄』の記事をもとに報告されたものである。もう一つは、『申楽談儀』の別本『聞書』にみえる、

世子ノ位、観阿ニ劣リタル所有、タレモシラズ、ト世子申サレシヲ、尋ネケレバ、「ワレハ、足利キタルニヨッテ、劣リタル也」ト云々。

という世阿弥の述懐である。

この二つ―小男ということと足が利くということ―がたがいに関連することはいうまでもあるまい。小男として生まれた世阿弥は、その体型にふさわしく、生来、足の利く役者だったらしいのだが、そのような世阿弥の役者としての特色は、そのまま少年時代の「異能」ともつながるように、筆者には思われるのである。そういえば、『申楽談儀』にみえる著名なエピソード―観阿弥の《自然居士》を世阿弥と見物していたときの将軍義満の言葉、「児（ちご）は小股を掬かうと思ふ共、ここはかなふまじき」の「小股を掬く」（奇策を弄する）なども、世阿弥の「異能」を伝える資料とみることもできるかもしれない。これを要するに、世阿弥が生来「異能」とも評される芸質の持ち主であったことは、ほぼ確実なのではないだろうか。

ここで注意されるのは、世阿弥が『申楽談儀』の時代（六十歳以後）に、足が利くことが役者としては欠点だと認識していたことである。普通なら長所として誇ってよいところを、逆に欠点としているのは、世阿弥の晩年期の思想の中核にかかわるものとして注意されるが、たぶん、ある時期から世阿弥は、理論だけでなく、実際の演技のうえでも、小男ゆえに足が利く、生来の「異能」的な役者としての特色を、あるいは抑制し、あるいは克服しようと努力していたのであろう。それがこのような発言となって表出したものと思われるが、世阿弥が到達した芸境の高さは、たとえばこのようなところにもうかがえるのではあるまいか。

なお、応安年間の醍醐寺での七日間の猿楽についての『隆源僧正日記』の末尾の観阿弥の「出世」を記したくだりは、『能楽源流考』では、「其以後名誉而、京辺被賞翫了」となっているが、この「賞」は公刊本ではさきにも引用したとおり、「常」となっている。義演自筆本もそうだったと思うが（うかつながら記憶がやや曖昧である。後日あらためて確認したい）、「常」なら、醍醐寺での能をきっかけに、観阿弥は以後京都で安定した地位を保ち続けた、ということがより明確になり、観阿弥の伝記にもいささか影響するところがあるように思う。

（大阪大学教授）